

アーリントン墓地の丘

武内龍次

大平さんにはじめてお会いしたのは大平さんが内閣官房長官のときで、昭和三十五年の十二月、私が西独大使から帰朝して外務省の次官になったときであった。外務省と内閣との間の意思疎通のため毎週月曜午後官房長官と外務次官の間で外交案件についての定期連絡の会合をもつことになり、これは大平さんが昭和三十七年七月第二次池田内閣の外務大臣になられるまで続けられた。大平さんはその頃から外交問題に深い興味をもっておられ、また池田総理の信任も深かったので、大抵の案件についてはこの会合で片がついたものである。外務大臣になられてからも私は引き続き次官として約半年その下で働いたが、大臣の真面目な仕事振りには感服のしどおしであった。大臣の立派な統率の下に外務省全体が一つとなって任務を果たすことができたことは有難いことであった。

この間、大臣と意見を異にするようなことはほとんどなかったが、一度だけ大平さんの意向に反するようなことになったことがあった。それは昭和三十七年九月の国連総会に出席されるに当たって、英語で代表演説をされるという話が持ち上がり、大臣もそういうご希望であったのを事務当局の方でいろいろ考量した結果、まず今回は日本語で同時通訳を使って、ということにしていたことがあった。一昨年の春、大平総理は東京で開催された日米欧委員会の総会の出席者を総理官邸の午餐会に招待された際、英語で歓迎のスピーチをされたが、その内容はもちろん、われわれが昔心配した発音の方も誠に見事で、欧米からの出席者の賞讃の的となった。私もこのスピーチに感心すると同時に昔のことを想い出し、大平さんは当時英語演説をやめることについて何もいわ

れなかつたが、恐らくは心中大いに不満だつたのではないかと恐縮したことであつた。

昭和三十八年から四十二年まで私は駐米大使を勤めたが、その間大平さんは昭和三十九年七月まで引き続き池田内閣の外務大臣としてわれわれを指揮された。この間、いくたの交渉、数回の日米経済閣僚会議、大使会議などで大平さんの下で一緒に働き思い出は多いが、今となってまず心に浮かぶのは、ケネディ大統領暗殺のあと葬儀参列のためワシントンに急行してこられた池田総理と大平外相が、葬儀後の埋葬式のためにアーリントン墓地の丘を歩いておられる姿である。埋葬が終つたあと森の樹々のなかに滲みとおるように吹奏された訣別のラッパの音律を、大平さんはどういふ感慨で聴き入られたことであつたらうか。

昭和四十二年に外務省から退いたあとは、私は大平さんにお会いすることは少なくなつたが、大平さんがその後政府と党の要職を歴任されて遂に総理大臣になれるまでの足どりを喜びをもって見守つてきた。ことに総理大臣になられたあとはお邪魔をすることを遠慮したが、一度思い立つて、一昨年の六月、総理の第一回外相時代の次官と駐米大使が五人集まつて総理を築地の藍亭に一夕ご招待したことがあつた。久し振りにお会いして総理の労を慰めるとともに、数日後に迫つた東京サミット会談についてもお話をしようという趣旨であつたが、総理は喜んで出席され、久し振りでゆつくり歓談することができた。「この次は僕の方でお招きするから」といつて総理は元気に帰宅されたが、一年もたたぬ間に、あれだけ心血を注がれたサミット会談のヴェネチアでの開催を眼前にして卒然として逝去された。

大平さんは常に快い微笑を絶やさず、人には謙讓と親切をもつて接しながらも、自身には勉強の拍車をゆるめることなく立派な世界の政治家になられた。日本国民のため世界平和のために、これからいよいよ働こうというとき、急に倒られたことは、ご自分もさぞ心残りであつたらう。ほんとうに惜しいと思ふ。

(元外務次官)